２　渓流にこだまする美声～カジカガエル　　下山　良平

カジカガエルは、日本に生息するカエルの中でナンバー１の美声の主です。古くから「河鹿」の名で親しまれており、「万葉集」でも２０首近く歌われています。また、現在でも、竹でできたかごに雄を入れて鳴き声を楽しむ風流人がいるそうです。

渓流で繁殖

カエル類の多くは、水田や池、沼などの止水（しすい）で繁殖します。カジカガエルは、渓流で繁殖する少数派のカエルの一つです。カジカガエルが繁殖する環境は、渓流と言ってもイワナやアマゴが棲むような源流部ではなく、平瀬が続くような上流部です。ちょうど魚のカジカ（鰍）が生息するような場所です。そんなこともあってか、カジカガエルと魚のカジカを混同する人もいるようですが、美しい声で鳴くのはカジカガエルの方です。

上伊那では、南アルプスから流れる三峰川やその支流の戸台川、中央アルプスから流れる太田切川や中田切川など、数多くの繁殖地があります。

図１　渓流脇の石の上で見つけたオス

ノミの夫婦

カジカガエルは、日本産のカエルの中で、雄と雌の大きさの差がもっとも大きなカエルです。成体の大きさはオスで35～44㎜、メスで50～70㎜ほどです。体重で比べると、雌は雄の約３倍にもなります。恰幅のいい大きなメスの背中に、不釣り合いなほど小さなオスがしがみついているさま（産卵前のペア）は、「カップル」と言うよりも「親子」のように見えるほどです。　アオガエル科に属していますが、体色はたいへん地味な灰色から暗褐色で、決して緑色になることはありません。それでも，アオガエル科のカエルらしく、手足の指先には吸盤があります。

美しい鳴き声はなわばり宣言

上伊那では、５月の連休前後から７月下旬にかけてのおよそ３ヶ月間が、カジカガエルの繁殖期になります。長い繁殖期の間、オスは水面上に頭を出した石の上で、盛んに鳴きます。鳴き声は、「フィー・フィー・フィー・・・・・」と、まるで小鳥のさえずりのような高く澄んだ声です。鳴き声は、日中にも聞くことができますが、やはり夜間の方がはるかに盛んです。

鳴いているオスは、１㎡ほどの狭い範囲をなわばりとし、そこに入り込んだ他のオスを鳴き声で威嚇します。それでも相手が出て行かない場合は、直接的な攻撃を仕掛け、相手を流れに突き落とします。つまり、カジカガエルのあの美しい鳴き声は、オスによるなわばり宣言そのものなのです。

産卵のため渓流を訪れるメスの数は、オスに比べて圧倒的に少なく、一晩あたりの性比（専門用語で「実効性比」といいます）はメス１匹に対してオスは数十匹にも達してしまいます。数少ないメスとペアになるため、それぞれのオスは３ヶ月にわたる長丁場を必死に闘い続けているのです。そうした涙ぐましい努力にもかかわらず，配偶相手を得ることのできるオスは，ほんの一握りだけなのです。

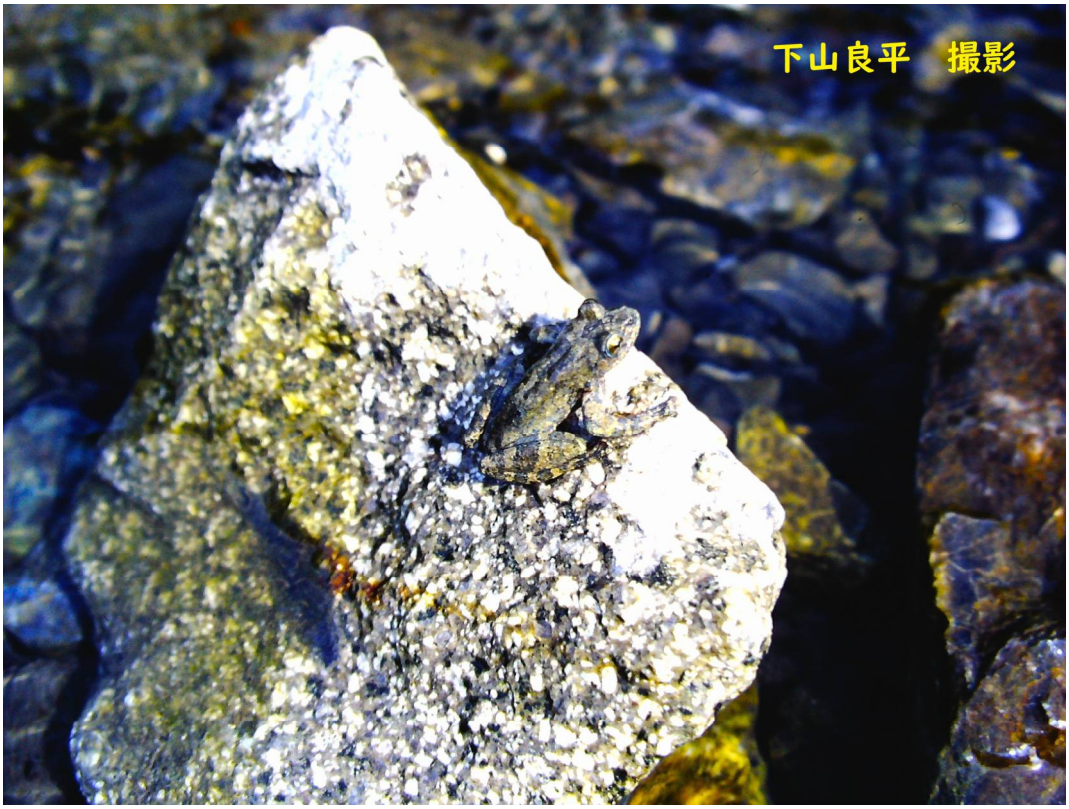

図２　石の上でなわばりを守るオス

浅瀬の石下に産卵

めでたくできあがったペアは、浅瀬の石の裏側にもぐり込み、そこで産卵します。卵は直径が２～３㎜ほどで、１匹のメスが200～600個ほどの卵を産みます。産卵が終わると、メスは渓流を離れて周囲の森へ帰っていきますが、オスは再び自分のなわばりへ戻って鳴き続けます。オスたちが周囲の森へ帰っていくのは、８月になってからです。

孵化したオタマジャクシはたいへん口が大きく、浅瀬の石の表面に付いた藻などを食べて成長します。止水で繁殖するカエルのオタマジャクシよりも尾が細長く、遊泳力もかなり強いようです。変態までの期間は、３～４ヶ月とされています。

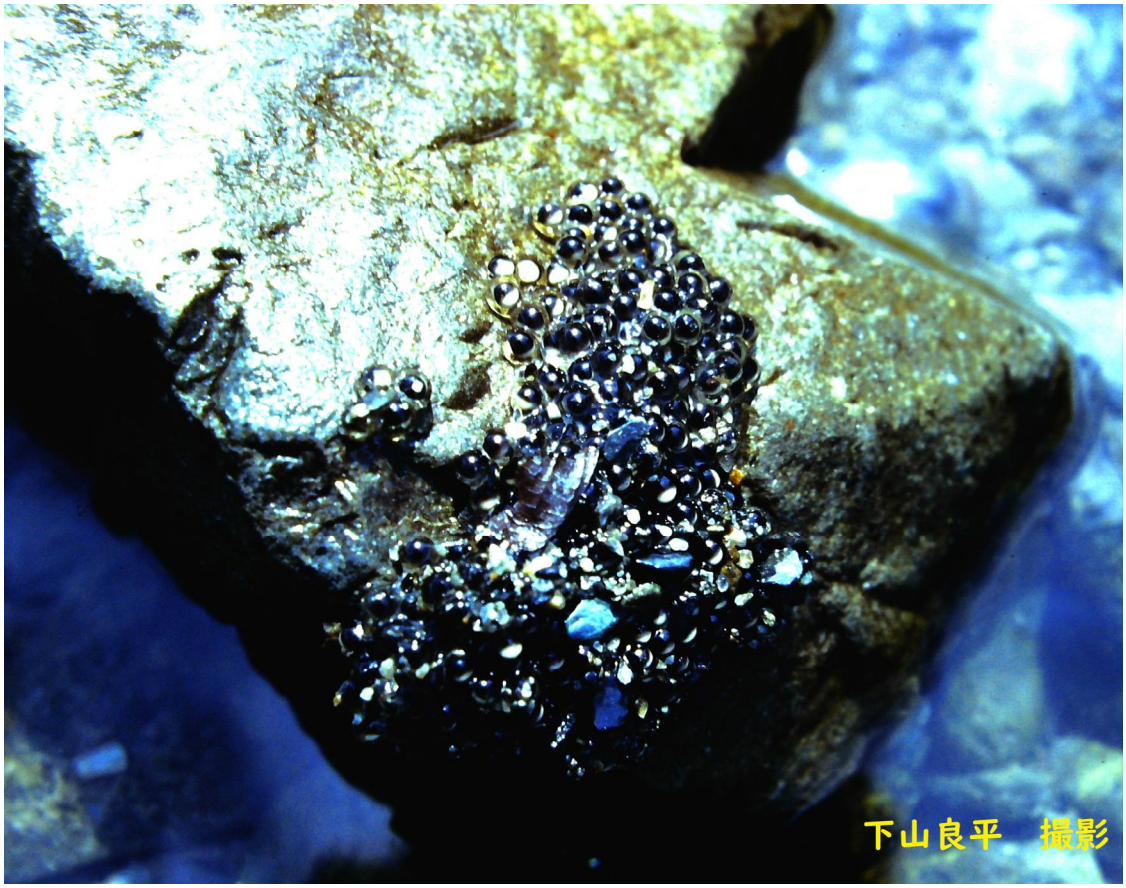

図３　流れの中にある石の裏面に産みつけられたカジカガエルの卵

（下山　良平）